

特集「長信↓短信」

高山邦男 三枝昂之氏の評論論考『佐佐木信綱と短歌の百年』が大変評判になっています。「心の花」の人間からすると自分の家族が取り上げられているような話でちよつとくすぐったい感じでもありません。それから、経塚朋子さんや鈴木陽美さんの語彙研究などを取り上げてくださっている所もうれしく思いました。また、この本に関連して「短歌研究」十二月号（短歌年鑑）では三枝氏と佐佐木幸綱先生が対談されています。

こちらもとても示唆に富む内容で、併せて読むとより理解が深まると思いました。

この本の位置づけとしては「前川佐美雄」、『昭和短歌の精神史』に続くもので、歌人論が同時に短歌史になるような書き方をしたと述べられています。最大の特徴はアララギ中心であった小泉荃三、木俣修の短歌史とは別の視点からの短歌史観になっているという点にあります。三枝氏は次のように語られています。

例えば、近代以降は「自我の詩」

とか「写生」とか、自分の日記代わりの折々の歌が中心だけれども、それだけでは済まないということ、信綱は一貫して言ってきた、短歌という詩型の奥行きを語るためにはそういう観点も大切ではないかと思いました。

これについては様々な論考をされていますが、一例として信綱の作品が持っていた「晴れの歌」という側面は印象に残るポイントでした。

本の概略に触れると、歌人信綱、研究者信綱、明治・大正・昭和の信綱、その時代の社会状況と歌壇が持っていた課題が切り結び生々しいドキュメンタリーにもなっていて、その面からでも面白く読める本です。

最後に次の記述を紹介しておきます。

川田順が挙げた「われ春風に身をなして……」は第一回「心の花」大会の題「春風」に応じた作品。へ人の心に秘められた憂悶を晴らすことは、歌道の徳の一つ

という信綱の信念が託された一首である。それは近代の短歌を切り開いた「自我の詩」や「写生」が視野に収めることの出来ない歌の力だった。

佐佐木信綱は、和歌短歌の千三百年を視野に収めながら、短歌百年の革新を貫いた歌人である。そのことが改めて尊い。

美帆シボ パリには日本からの送りや日本の年金で生活している人たちがいます。現在の円安は彼らの生活に大きく影響し、ロシアのウクライナ侵攻以来、値上がりが止らないフランスの暮らしはフランス人以上に耐えがたいでしょう。日本経済の低下はフランスでもニュースになっていますが、その逆に、パリでは日本の文化や料理がますます身近になりました。

パリ郊外のマーケットにも必ず日本のウイスキーが銘柄豊かに並び、冷凍食品店にはピカール特製の枝豆・串焼き・寿司・餃子・餅アイスがあります。日本の大福に魅せられたフランス人女性はトゥー

ル地方で餅の販売を始め、今やパ
リに「餅の家」を三店舗持ち、和
菓子の講習もしています。

毎年二回、北ドイツからやって
くる私の友人は日本ロスがバリで
癒されると言うほど。そこで、日
本ショッピング・ツアーを提案し、ユ
ニクロ・無印のほかに、最近開店
された「Tusshai」という店にも
案内しました。オーナーはフラン
ス人で「日本」へのこだわりが至
る所に見られます。「Shokudo」
「Kissaten」だけでなく、食品販売
コーナーにはありとあらゆる調味
料や食品、日本酒、食器類が八百
平方メートルの店内にセンスよく
配置され、フランス人の若者であ
ふれていました。

日本好みのフランス人や日仏家
族の子ども達は日本人以上に「日
本的」であろうとし、彼らの経営
する料理店は伝統的和食に限ら
ず、日本のサンドイッチの美味し
さを忠実に伝えたり、魚出汁の
ラーメン店内を昭和のポスターや
黒電話、本物そっくりの蠟の魚で

装飾したりしています。

茶道、生花、書道だけでなく、
漫画や狂言、香道を学ぶフランス
人も増え、三味線や尺八のプロま
で誕生しています。

そして、フランス短歌会にも二
十代のフランス人が入会し、日本
の中世日記文学の素養を生かした
歌を詠んで、日本人の仲間を唸ら
せているのです。パリで発行して
いる「フランス短歌」誌に掲載す
る彼の短歌は先ず日本語で詠み、
私はその仏訳をお願いする次第。
このフランス人の存在がパリの短
歌仲間の良い刺激を与えています。
森部信次 短歌二百分の物語―。
二〇一四年から「心の花」誌の
校正担当として編集後記を書いて
きた。二十一字×三行、記号を除
くと、きっちり短歌二百分の六十
二文字である。校正に関すること
だけでなく、逝去した文学者から
熱波で死んだメダカまで、折々の
ことを六十二文字に綴ってきた。
ひとりよがりには違いないが、大
切な場所である。

昨年十一月の「二五周年記念
大会」では、嬉しいことがあった。
▼「どうする家康」に家康の生
母が大が再嫁した久松長家（リ
リー・フランキー）が登場。知
多出身の久松潜一のご先祖だろ
うか。（二三年四月号）
懇親会で、潜一の孫の久松洋一
さんが、この後記に目を通して下
さったことを知った。久松長家は
愛知県の知多半島の阿久比城を本
拠とした戦国武将である。久松潜
一は領内の東浦出身ゆえ一族の末
裔と思われるということで、久松
洋一さんと意見が一致した。ちな
みに、久松長家・於大の子孫は、
久松松平家（伊予松山藩主など）
として明治に至っている。

兵庫の内田さやかさんにも、歌
会の休憩時間に四年前の後記につ
いて声をかけていただいた。

▼朝日4・27夕「惜別」に長崎
市長の平和宣言起草者だった芝
野由和が載った。高校の同級。
癌で痩せ昔の面影に戻った。お
疲れ様。（一九年七月号）

内田さんは「長崎在任時に市民
活動で芝野先生に大変お世話にな
りました。コロナ禍で全国大会な
どの機会がなく残念に思っていま
したが、ようやく芝野先生のこと
をお伝えできます」とおっしゃっ
た。内田さんとは、高校時代の芝
野のこと、長崎での芝野のことな
どをしばし語らった。

甲府なぎの会の桐谷文子さん、
名古屋歌会の細溝洋子さんにも編
集後記の拙稿について感想をいた
だいた。思いのほか読者の多いこ
とを喜ぶとともに、これからも心
して「六十二文字の物語」に向か
わねばならぬと思っている。

山田幸子 九月十日、企画展「伊
藤一彦展」が、伊藤先生が館長を
務める若山牧水記念文学館で始ま
り、宮崎市から車で約1時間半、
牧水生家のある日向市東郷町へ出
かけた。

この企画展は、伊藤先生が昨年、
旭日小綬章を受章したことを記念
し、日向市、日向若山牧水顕彰会
などが開催したもので、同日は記

者会見も行われ、報道各社が取材に訪れていた。

展示は「短歌との出会い」「牧水との出会い」「宮崎でうたう」で構成され、牧水の孫の榎本篁子さん、佐佐木幸綱先生など交流のある方々が伊藤先生との思い出をつづった直筆原稿や、歴代牧水賞受賞者が伊藤先生を詠んだ歌の短冊、高校教諭時代の教え子で俳優の堺雅人さんのエッセーなど約130点が並び、歌人として、牧水研究者としての活動がパネルで紹介されていた。

また、伊藤先生が高校時代に雑誌「高校コース」に作文を投稿し、佳作入選した当時の雑誌の実物や、会誌「早稲田短歌20」の実物なども展示され、伊藤先生がどのように短歌に出会い、その道へ進まれたのか、また、牧水との巡り合いによって伊藤先生の短歌と人生がどのようにつくられてきたのかを知ることができた。それら貴重な資料の数々は、一つ一つ鑑賞していると、あっという間に時間が過

ぎてしまい、一度の訪問では時間が足りないと思うほどで、このような先生が宮崎にいらっしやることの幸せを感じた一日であった。

吉川良登 私は二〇二二年に『高校生短歌甲子園の魅力と作法』を出版しました。

収録した大会は四年分。宮崎県日向市で二〇一八年と二〇一九年に開催された「牧水・短歌甲子園」。続いて二〇二〇年と二〇二一年に国文祭・芸文祭の一環として宮崎県等の主催により開催された、全国高校生みやざき短歌甲子園（盛岡市・高岡市・日向市で開催された大会の成績上位校による初の頂上決戦）。

本書出版の目的は次のとおり。宮崎県内で開催された大会は全てが動画によって公開されています（他の大会にはない特徴の一つ）。しかし、動画は長時間に及ぶため、ディベートや審査員講評等の非常に有益な情報を誰でも効率的に利用できるようにしたい、その一点です。

本書を出版できましたのは、偏に次のような恩恵にあずかることができたためと感謝しています。

①郷土の偉人・若山牧水を顕彰すべく伊藤一彦先生が大会を企画・運営して来られ、魅力のある大会になっていること。②長年に渡って伊藤先生が発行されている超結社誌「梁」に私の大会観戦私記を四年に渡って掲載して頂いたこと（単行本化は観戦私記の再編集によって実現）。

また、牧水賞選考委員のお一人である高野公彦氏の一首「早寝して子はみづからの歳月を生き始めをり夜の霞草」の結句に関して、私は永田和宏著『新版 作歌のヒント』とは少し異なる解釈の可能性があるに気付き、自著に述べました。そして、二〇二三年に開催された牧水賞授賞式の後、ご本人にその点を確認することができましたので、七行追記し改修出版しました。

山口仁紀子 十月八日、「第65回富山県短歌大会」が富山県民会館

にて開催され、黒岩剛仁先生の講演「短歌とふれあう『現代万葉集』二〇二二版より」を聴講しました。

高校で二学期の授業がなんと全て短歌という国語教師との出会いが作歌のきっかけだったこと。早稲田大学の学生時代、佐佐木幸綱先生に「論語」に因らんだご自身の歌人ネーム「剛仁」(タケヨシ)について、「ゴウジン」や本名の「タツヤ」の方が強そうだと言われたことなどを和やかにお話されました。

「俺は最初「立山」がいいな。マスクはずせよ。さあ定綱はまず何飲む？」は、『現代万葉集』のなかで幸綱先生が富山の「旅」をテーマに詠まれた歌。まるでお二人が、向かいのカウンターにお座りになっているようなラフな臨場感。私も大好きな歌です。

黒岩先生も講演の前夜はおいしい富山のお酒をご馳走になったとのことで、併せて、「心の花」の酒席のお話も微笑ましく伺いました。

早稲田大学の「短歌と拓本の会」で高岡古城公園を訪れて以来なんと45年ぶりの富山ということでしたが、今では新幹線で二時間と少しの距離となりました。昨年は同じ会場で、頼綱先生の講演をお聴きしました。「心の花」の歌人の方に二年連続でお目にかかれて、とてもラッキーでした。黒岩先生、ぜひまた富山へお越しになつて当地の名酒をゆつくりご堪能ください。

阿多真也 私は宮城刑務所の教師師（この春に退職されました）に短歌を教えて頂き、短歌の力を知り、自分でも作詠するようになりまし。そしてその教誨師の先生が仰られた言葉が「述志の歌を詠むように」でした。

逮捕・起訴されて、未決の頃から「こんな筈ではなかった。何故こんな事になったのか」と内省してはおりましたが、述志の短歌との出会いによつて、それ迄以上に深く考えるようになり、いつしか自分の内に確乎たる道徳心を打ち

建てることができました。

そしてその道徳的視点を以て自らの過去を振り返つた時、「なんて事をしてしまったのか」と深く苦悩するようになったのです。

短歌は、道徳は私に幸せとは何かを教え、救いをもたらすと同時に、苦しみも与えるのです。

思うにこれこそが世の被害者の、遺族の求める加害者の苦しみではないでしょうか。

しかし多くの加害者（受刑者）は、道徳心なきが故に罪を犯し、また道徳なきが故に更生できず、にいるのです。

こうした姿を受刑生活で目にする中で、私は彼らの導となりた、道徳の種を播きたいと思うようになりまし。

しかし私の短歌は「反省してます。許して下さい」アピールではありません。私が真に、一番届けたい対象は受刑者なのです。

それ故に、私はあえてユーモアを隠しません。悪ふざけは問題外としても、受刑生活や出所後の苦

痛に満ちた生活、その苦しさを笑つてしまえるユーモアを受刑者は持つべきだと考えるからです。

ただでさえ重いテーマを詠むのですから、息抜きや、興味を持つて貰いたいのです。

道徳の道は果てしなく、進むほどに険しくなります。故にその間は広く、敷居は低くあるべきなのです。

西村徹 SNSフェイスブックで、我が家に伝わる「庚申さん」の掛け軸についても触れたところ、大阪の庚申堂堂守の先生のお目に止まり、「いいね」とともに、詳しいお話の返信もいただいた。

「庚申さま」と呼ばれている仏さまは「書面金剛明王」で、当病平癒、無病息災、諸願成就の仏として知られている。

私の祖母が「庚申さん」を信心していたので、2ヶ月に一度来るという庚申の日は、前日から牡丹餅をお供えて拝んでいたことを思い出す。私は子どもの頃、仏壇近くに飾られる「庚申さん」の掛

け軸に描かれた猿か天狗のような顔をしたそのお姿に不思議な思いで、関心を持っていた。

その掛け軸は経年劣化でよく傷んで来ていたが、ある時、母が表具屋で表装をやり直したことを聞き、客間の書院に長年仕舞われていたが、このたび、出してみた。

そして、この掛け軸の写真をSNSで出したところ、四天王寺庚申堂守の先生からご連絡をいただいたわけである。

平成二十九年頃には、母は庚申さんにお供えをした歌を詠んでいた。・庚申の掛け軸かくるもひさしかり亡姑のしぐさにて供ふばた餅

伊藤やすこ「憧れのオリオン星座とほくなり貴方は星になれたかどうか」頂ける遺族年金あたたかく炬燵に入りて雪を見てをり」

「心の花」二〇一六年五月号に掲載された岐阜の澤田安子さんの歌である。

特選ではなかったが、私は深く感動し、「年賀名刺」の住所を見て、葉書でファンレターを出し

た。すぐにお返事をいただいた。

以来、月に一通ずつ、「心の花」の相手の歌の感想などを書いて、文通を続けた。

澤田さんは土岐市肥田^{ひだ}にお住まいで、肥田から名古屋までは電車で十分なので、名古屋歌会に毎月出ている、とのことだった。

三年前の澤田さんの歌に、開腹手術を受けることになり、体中に管を巻かれ、「サイボーグかな」とあり、びっくりし、心配した。不安な状況を客観視して、ユーモラスな結句で詠いあげていることに感心した。「手紙書いてポストまで歩くはステキで立派な私のリハビリです」というお葉書をいただいた。その後、澤田さんは二度目の手術を受け、衰弱し、二〇二三年の三月二十七日、ご夫君のもとに旅立った。「心の花」には、もう澤田さんの歌が載らなくてさびしい。澤田安子さんとご夫君は、肉眼では見ることでできない小さな小さな星になって、夜空で静かに光っていることだろう。

沢田昌子 湘南歌会の十一月十六

日通常の歌会の後には松森邦昭さんの第三歌集『しゃれこうべの歌』のお祝いの会をいたしました。

晋樹先生のお祝いの言葉。高島さんからお花の贈呈に続き、事前に三首とその中の一首の感想や批評を短冊にしてまとめた冊子をもとに合評会を進めました。先生は医師で歌人は斎藤茂吉をはじめ上田三四二さんのように内科医が多いと脳神経外科医でいらした松森さんをご紹介。会員の皆様の挙げたのは表題となった棚に置かれた若い女性のしゃれこうべを詠った八首の中から。他には花木、鳥、空などの自然詠。各地に旅行された歌が挙げられ、「お医者さん肉声に触れる機会は普段殆どないので興味深くよみました。」の言葉も。時事詠・自然詠・旅の歌と、どの歌も静かな、やわらかな松森さんのまなざしを感じます。第二歌集『脳^{なまこ}の海』と共に読んでいきたい歌集です。

・どくろの眼 深いところに穴の

あり花も見えていた星も見えていた

・わが意志で生きてゆくこと死ぬことも出来ないままに「植物」の日々

・あの雨もあの泥流も夢であれ梅雨あけし空 雲うつす海

『しゃれこうべの歌』

伊藤克子 八月十五日にあたり、母から聞かされてきた話を記しておきたいと思います。

祖父は先の大戦で南方へ出征し終戦後生きて帰還しております。帰って来た時に軍服の襟にシラミがずらつと並んで着いていたそうです。

子供の頃に「何か飲みたい。」と母へ言うのと、「水を飲め。」と言われました。「他の物が良い。」と言うと、「兵隊さんは水が飲めなかつた。お父ちゃん(祖父)は夜にジャングルの中で水を探してやつと見つけて飲んで、明るくなつてその水を見たら、汚らしいドブ水だつたと言っていたんだよ。」と聞かされて育ちました。

祖父は亡くなる一か月前に、小

学校に入学する姉のランドセル代

一万円を届けに往復二十キロの距離を自転車であつてくれたそうです。

私が幼稚園に入る年の春、亡くなる直前に病院へ祖父のお見舞いに行くのと、ベットに横たわり不動状態で顔に死相が出ていました。葬式の時に菊の花に包まれた祖父の顔は、今でも憶えています。

母の実家は農家でしたので、東京から疎開して近所に住む親子がさつま芋の芋掘りをした後の畑を掘らせてくれと頼んできたそうです。許可されて畑の隅々を掘つても、ほとんどさつま芋は見つからなかつたようです。着物と米の物々交換を申し出る人もいたようですが、お米はあまりあげられなかつたそうです。祖父や母のような競争体験を繰り返さない平和な国であり続けて欲しいです。

山田英夫 私には幼馴染の大親友がいたのですが、十五才の時に事故で先立ちました。以後、一度でいいから夢にでも出て来てくれなものかと思うのですが、一度も

見たことがあります、それどころか、亡くなった父親をはじめ、友人、知人、誰一人として夢で会ったことがないのです。

今年も、お盆くらい誰でもいいから会いに来いよ、と願ったのですが、だあれも来てくれませんでした。私の所よりも先に行かなくてはならない所があるのでしよう。死んでもからも皆、忙しいのですね（笑）

旭川刑務所では、十一日〜十六日の六日間がお盆休みでしたが、私は炊事工場に居るので、連休はありません。土・日・祝祭日も関係なく、休日は炊場勤務受刑者で振り分けて、順番に休みます。一ヶ月の休日分の日数は確保できるのですが、翌月の自分の休日が分かるのが月末なので、予定を立てるのが大変です。それでも心の花と武蔵野歌会には、メ切までに頑張つて歌を送つてます。

心の花の会員の皆様は、どのようにして短歌と出会い、興味を持つたのでしょうか。きつかけなど

を知りたいです。是非、「心の花」で特集かコーナーを作つて下さい。

坂口弘 実は私、ガンに罹患しました。膀胱ガンです。この膀胱ガンをわずか二〇日で治した記録をご報告します。

六月に半年に一度の定期健康診断を受けました。この時、二〇年ぶりにレントゲン撮影をしたのですが、後日、右肺に鶏卵大の影が映っており、ガンが疑われました。

それでガンの血液検査であるCEA検査と肺の断層写真をX線で撮る処置がとられました。結果はCEAの腫瘍マーカー値が3・8の正常値（5・0以内なら問題なし）、胸部の断層写真も影など映つておらず、異常なしでした。レントゲン写真の影は「老化現象でしょう」と医師は言いました。

通常はここで終るのですが、医師か又は医務の職員が気を利かせ、膀胱ガンのナインテイン・ナイン（19・9）という血液検査をして呉れました。これで異常が

見付かったのです。腫瘍マーカー値が57を記録し、これは限界値の37を超えて「かなり高い数値」（医師）ということでした。この時、

膀胱ガン罹患を確信しました。実はこの数年、体重減少に悩まされていました。適正体重64kgが幾ら食べても増えるどころか減る一方で、この六月には53・5kgまで減少してしまい、風呂場の鏡に写る姿は文字通りの骨皮筋右衛門でゾツとしました。この事実と併せ膀胱ガンを確信したのです。

その場で腹部の造影断層写真を撮ることが決り、五日後写真を撮りました。その二日後、呼び出されて結果を知らされました。何と影なし、膀胱は異常なしでした。これをどう解釈するか。医師は画像を見て事実を告げるだけでした

が、私は腫瘍が消失したものと解釈しました。それは腫瘍を消す努力をしていたからです。

6月23日に肺に影があることを知らされると、直ちにハルン（尿）の大量吸引を始めました。出るハ

ルン、出るハルンを飲みまくりました。勿論これがガンをやつつけて呉れることを知っているためです。三日後早くも効果が現れ、体重が1・3kg増えました。待望の体重増加の実現を目の当りにして、ガンに勝てる自信を得ました。以後7月17日現在まで飲み続けています。7月14日の異常なし告知の日は、腫瘍の縮小を予想していました。結果は消失で予想をはるかに上回る成果を得たのでした。